

《論 文》

フランシス・ブリンクリー著『陶磁芸術』における肥前磁器研究と柿右衛門様式磁器の用語「乳白」

櫻庭 美咲

はじめに

本稿では、アイルランド⁽¹⁾生まれの英国人フランシス・ブリンクリー (Francis Brinkley, 1841-1912) (図1) による著書『日本：その歴史、芸術と文学 JAPAN: Its History Arts and Literature⁽²⁾』(神田外語大学附属図書館所蔵。8巻シリーズ。1901-04年刊) を取りあげる。本学附属図書館の貴重書コレクションには、同シリーズのほかにも1875年刊『語學獨案内⁽³⁾』(書名の表記は原文通りとする。以下同様)、1897、1904年刊『和英大辭典⁽⁴⁾』および1897年刊の10巻本『日本：高名な日本の権威と学者による叙述と図版 *Japan: described and illustrated by the Japanese written by eminent Japanese authorities and scholars*⁽⁵⁾』をふくめ、ブリンクリーの著書が豊富に所蔵され、まとまりのある一群を成している。そのなかから今回は、『日本：その歴史、芸術と文学』に第8巻として所収される『陶磁芸術 KERAMIK ART』第2章に掲載された肥前磁器研究を取りあげる。ブリンクリーの肥前磁器研究は邦訳がなく、いまだまとまった紹介はなされていないため、ま

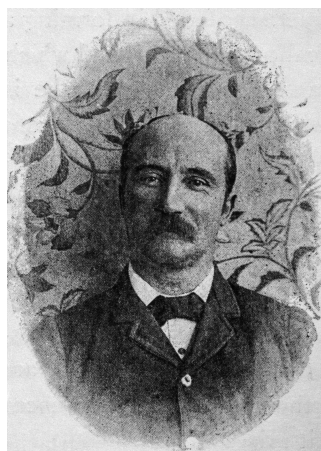


図1 フランシス・ブリンクリー肖像 (出典：Henry Norman, *The real Japan : Studies of contemporary Japanese manners, morals, administration, and politics*, London, 1892 神田外語大学附属図書館所蔵)

ずその概要を述べる。それに加えて本稿では、終章において、肥前磁器の説明として使用される「乳白」という用語についてクローズアップしたい。この用語がプリנקリーの『陶磁芸術』に由来し、彩壺会の研究を通じて今日にいたるまでわが国の柿右衛門様式磁器研究において使用されるに至る経緯について考察する。

プリנקリーは、大政奉還の1867（慶應3）年に来日し、工部省工部大学校（後の帝国大学工科大学）の数学科教員などを経て1881年より没する直前までの約三十年間にわたり横浜で発行された英字新聞『ジャパン・メイル *Japan Mail*』の社主を務めた。『ジャパン・メイル』は、当時『ジャパン・ヘラルド *Japan Herald*』、『ジャパン・ガゼット *Japan Gazette*』とともに横浜の三大英字新聞とされた有力紙であった。プリנקリーは、『ジャパン・メイル』社主兼編集長として、社説は勿論他人の署名のある記事以外の大部分を執筆したと推測されるが、その社説は条約改正や日英同盟を訴えるなど常に日本擁護の立場に基づくものであった。1885～97年・1897～1912年にはロンドンの『タイムズ *Times*』の東京通信員としても欧米に影響力を持ち、英国における日本への世論を好転させることを通じ1902年の日英同盟締結に貢献したとされる⁽⁶⁾。また、日本政府相談役や日本郵船株式会社顧問を歴任するなど、日本の政財界とも密接な関係を保つ。また、1884～1885年の朝鮮危機の際や1904～1905年の日露戦争後の条約改正でも著しい貢献を成し、逝去直前日本政府より勲二等旭日重光章を授与された⁽⁷⁾。

こうした職務の傍らプリנקリーは日本にかかわる研究を行い、数多の著作を世に送った。その守備範囲は頗る広く、後述の通り政治、語学や文化、芸術、歴史分野にまでおよぶ。語学研究は後述の辞典等に、歴史・芸術についても数多の著書や論文を発表した。なかでも先述の『日本：その歴史、芸術と文学』は、日本の文化、芸術、歴史研究を8巻の大規模なシリーズ本であり、8回版を重ねた。彼の高度な日本語能力に基づく詳細な記述が当時の東洋研究家の注目を集めた。ジャーナリズムの手法により日本の歴史文化を扱った英語版通史の第一号とも評されている⁽⁸⁾。

プリנקリーは日本美術の収集にも精力を傾け、膨大な数の日本と中国の陶磁器、浮世絵⁽⁹⁾を収集した。彼の肥前磁器収集は文部省による小学校の教科書『こくご一』（昭和23年）に取りあげられるほど国民に親しまれていた。プリ

クリーの収集の中心は、粟田焼（京焼の一種）、肥前磁器の色絵、薩摩焼、九谷焼と清朝磁器であったと推測されるが、彼のコレクションの一部は1880～90年代に売却され⁽¹⁰⁾米国、英国に散逸し、その一部がボストン美術館に所蔵される⁽¹¹⁾。彼はこれらの売却後も陶磁器の収集を継続し、自邸の洋館に多数の陶磁器コレクションを所蔵していた。しかしそれらは1900（明治33）年に起こったブリンクリー邸の火災により焼失した⁽¹²⁾。彼は火災後も陶磁器収集を継続したようであるがコレクションは現存しない⁽¹³⁾。

陶磁史研究の領域において、ブリンクリーの存在は、もっぱら彼の陶磁コレクションに関する研究を通じて周知されてきた⁽¹⁴⁾。現在もっともまとまった形で伝世する彼の陶磁コレクションは、本稿第2章で取り上げる静嘉堂文庫美術館が所蔵する肥前磁器⁽¹⁵⁾、ならびに清朝磁器⁽¹⁶⁾である。しかしながら、上述の通りブリンクリーの活動は極めて多面的であるため、陶磁史の視点のみに立脚しては彼の研究の特質を正確に把握することはできない。そのため、本稿では『日本：その歴史、芸術と文学』第8巻『陶磁芸術』中最も主要な章である「2章 肥前磁器」に基づき、彼の肥前磁器研究のおおまかな全体像を把握しつつ、ブリンクリーの経歴や学識、業績や日英側からみた評価もふくめ総合的に分析する包括的な手法を取る。

1. 著者フランシス・ブリンクリーについて

フランシス・ブリンクリーは、アイルランドのレインスター県ミース州の貴族の家に、父マシュー・ブリンクリー（Matthew Brinkley, 1797–1855）の13番目の子として1841年に誕生した。母はグレイブス副司教 Dean Graves の娘、祖母はフランス王室の後裔、祖父のジョン・ブリンクリー（John Brinkley, 1763–1835）は宮廷天文学者に任命されるほどの高名な学者であるとともに、アイルランド南東クロイネ Cloyne のカトリック教会の司教 Bishop も務めた。ジョンは数学の学位試験で首席を占めスミス賞を受賞するほどの俊英で、ダブリン大学の天文学教授として教鞭をとり、天文学に関する彼の著作『天文学の基礎 *Elements of Astronomy*』は、彼の死後30年間も教科書として使用され続けた⁽¹⁷⁾。母方の祖父リチャード・グレイブス（Richard Graves）もトリニティー・カレッジのギリシャ語の勅任教授であるとともに、アイルラン

ド聖公会系の聖ジョン・バプティスト大聖堂（St John the Baptist Cathedral, Sligo）のアルダー司教代理 Dean of Ardagh であった。フランシス・プリנקリーの次兄リチャードは著名なフランス語学者。姉妹のジェーンはアイルランド最古の名門の一つであるダブリン州のクロンタフ城（Clontarf Castle）の領主ヴァーノン大佐に嫁ぐ。姉妹のアンナは、アイルランドの旧家ミッチェルスタウン城（Mitchelstown Castle）の領主キングストン伯爵に嫁いだ⁽¹⁸⁾ことから明らかであるように、プリנקリーの出自は生粋の貴族階級であった。

フランシス・プリנקリーはダブリンのダンガノンおよびトリニティー・カレッジで学び、数学と古典学を学びいずれも首席を占めた。卒業後は、1741年設立されイギリスで最も伝統のあるウーリッジ（Woolwich）の士官学校王立陸軍士官学校（The Royal Military Academy）に進学し砲術を学ぶ。当時イギリスではウーリッジとサンドハーストに王立陸軍士官学校があったが、第二次世界大戦後統合されサンドハースト王立陸軍士官学校となった。軍事学校は、イギリス内外各国の王族や貴族達が学ぶ高等教育機関であり、近年ではイギリス皇太子チャールズの子であるウィリアム王子、ヘンリー王子が入学したことでも知られる。同校修了後1867年より、プリנקリーは母方の家系の従兄である香港総督リチャード・マクドネル（Sir Richard MacDonnel, 1814-1881）の私設秘書として香港に滞在した⁽¹⁹⁾。1864年以来英国軍隊は香港から日本に一部隊を移駐していた。その一環で中尉であったプリנקリーは在日英国軍隊の一将校との交代として、1867（慶應3）年に26歳の若さで英国公使館の王立砲兵隊士官として香港から日本へ派遣される⁽²⁰⁾。以降、プリנקリーは没年まで一度も帰国することなく日本に生きたのである。

プリנקリーは、将校時代貪欲に日本語を習得し、その研究に取り組んだ。その進歩は著しく、プリנקリーが流暢に日本語を話し漢字の読み書きにも精通していることが、やがて日本の陸軍将校たちの知るところとなる。1871年より1876年まで彼は海軍砲術学校の主任教師に抜擢され、明治政府海軍省の御雇いとなった⁽²¹⁾。その間、彼は日本人にいかん英語を習得させるかを考え、その構想をまとめた英語入門書『語學獨案内⁽²²⁾』を1875年に刊行した。本書は972頁の大著であり、例文が多く説明が非常に詳細である。英語塾などでも教科書として採用されたため初版以来少なくとも10度版を重ねた⁽²³⁾。1909年刊の改訂版『新語學獨案内』には伊藤博文の序文が掲載されている。そのなかで

伊藤はプリנקリーの日本語能力を「余カ曾識ノ外國人ニシテ或ハ官務ヲ以テシ或ハ教職ヲ以テシ来テ我國ニ在リテ國語及文章ヲ研鑽講究スルノ士ニシテ足ラス中ニ就キ本書ノ著者〔プリנקリーのこと（筆者の補足）〕ハ尤練達ノ一人トシテ毎ニ敬服ス所ナリ」（引用文の表記は原文通りとする。以下同様）と評し絶賛した。1878～1880（明治11-13）年には工部省工部大学校の数学科教員に任命された。この間、水戸藩士の娘でキリスト教の家庭に生まれた田中安子を妻に迎え、日本における国際結婚の先例を開くなどした⁽²⁴⁾。1881（明治14）年より、プリנקリーは英字新聞『ジャパン・メイル』の権利を獲得し社主兼編集長となり、その逝去の年まで社主を務める。

『ジャパン・メイル』は、1870年に英国人 W.G. ハウエルと H.N. レイが『ジャパン・タイムズ *Japan Times*』（1865年創刊）を買収し、横浜で改題発行した英字新聞であった⁽²⁵⁾。『ジャパン・メイル』は、他紙よりも真面目で学術性が高いという定評があり、社員の多くは日本アジア協会 The Asiatic Society Of Japan (ASJ) で活動し、社会的にも活躍していた。また、編集者や記者の多くがロンドンの『タイムズ』の日本特派員であったことから同紙は重視された⁽²⁶⁾。1877年以降同紙は所有権を転々としたのち、1881年にプリנקリーの所有するところとなった⁽²⁷⁾。同紙は横浜で発行されていたが、プリנקリーは都内の洋館に住み⁽²⁸⁾、日本政府要人や各国大使をはじめとする西洋人コミュニティのネットワークに常に身を置いた。

プリנקリー自身は1880年代より自ら筆を執り、社主となった後も実質的な編集長を務めていた。『ジャパン・メイル』は他紙よりも文学的で格調高く、プリנקリーの関心を反映して芸術、学術関連の記事が際立って多いことに加え、親日的な姿勢にその特徴がある⁽²⁹⁾。『ジャパン・メイル』は日本政府から助成を受け、日本の利害を代弁する役割を果たした新聞とイギリス側から揶揄されたが、それはプリנקリー以前のハウエルやレイの時代以来の体質であった⁽³⁰⁾。また、プリנקリーは日本文化に造詣が深く、茶の湯をたしなみ、河鍋曉斎に入門して日本画を学び、日本陶磁の研究に打ち込みつつ、後述の通り膨大な数の日本陶磁のコレクションを形成。彼が他の欧米人と比較にならぬほど日本人を理解し、欧米社会に対し日本を擁護したことは、彼が日本文化を愛好し、日本人女性と「正式に」結婚し、日本の政界人とも自由に会話できたことに基づくが、こうしたあらゆる点が当時の英国人としては異質であった。

社主としての職務の傍らブリンクリーは多くの著作を世に送る。1896（明治29）年には南条文雄・岩崎行親との共著で『和英大辞典⁽³¹⁾』を三省堂から出版。1685頁から成る本格的な和英辞典であり、当時和英辞典として最も広く用いられた。この辞典の出現により、1867年の初版以来版を重ねてきたヘボンの『和英語林集成』の売行きが急減したほどであった⁽³²⁾。また、ブリンクリーは持ち前の文才と高度な日本語読解力を基礎に文化、芸術、歴史分野に関する数多くの論文や著書を刊行し、日本文化を海外に紹介した。代表的な著書7冊を年代順に挙げる。

1冊目は1893年シカゴで開かれたコロンビア万国博覧会に合わせて刊行された『日本帝国の歴史 *The History of the Empire of Japan*』である。2冊目は、1895年京都で開かれた第4回内国勧業博覧会のために、京都市に委託されて執筆した『京都勧業博覧会案内 *The Kyoto Industrial Exhibition of 1895: held in Celebration Hundredth Anniversary of the City's Existence*』。3冊目はボストンのJ.B. ミレット社から1897年に刊行された『日本：高名な日本の権威と学者による叙述と図版 *Japan: described and illustrated by the Japanese written by eminent Japanese authorities and scholars*』という全10～15巻からなる大判のシリーズ本である。本書は様々な異なる版があるが、とりわけ10巻本のDe Luxe版⁽³³⁾はコロタイプ写真をはじめ手彩色された写真を多数掲載した非常に豪華なもので、岡倉覚三（天心）の解説付きである。本書はセオドア・ルーズベルト大統領の対日政策にも影響を与えた⁽³⁴⁾。4冊目は1901～05年に刊行された本論文の主題『日本：その歴史、芸術と文学』である。本書については第3章に後述する。5冊目は1902（明治35）年刊の『ブリタニカ百科事典 *Encyclopedia Britannica*』（第9版）第29巻の項目「日本」である。本項目では日本の地理、歴史、美術を中心に60頁分が記述された。本項目執筆の指名はブリンクリーを日本研究の第一人者と位置付けることを意味するものといえよう。6冊目は1908年にロンドン・タイムズ出版社から刊行された『歴史家の歴史 *Historian's History of the World*』全25巻の24巻目に収録された「日本の歴史」の項目であり、160頁にわたる大項目であった。7冊目はブリンクリーの死後1915（大正4）年にロンドン・タイムズ社から刊行された『日本民族史 *A history of the Japanese people from the earliest times to the end of the Meiji era*』である⁽³⁵⁾。

これら日本学に関する著書、新聞社の社主としての名声、政財界への多大な貢献にもかかわらず、今日、プリנקリーの知名度はなぜか高いとは言えず、謎めいた印象すらある。しかし彼が生前相当な名士であったことは、少なくとも49社の日本の新聞に訃報が報じられたことから確認できる⁽³⁶⁾。1912年10月12日、プリנקリーは心臓病に肺炎を併発して重態となった。その直後10月18日、日本政府から勲二等旭日重光章を授けられる。10月28日、麻布広尾町の自邸で逝去。11月1日、前述の築地三一教会における盛大な葬儀が挙行され、青山墓地に埋葬された。

葬儀に参列した林董通信相、斎藤実海軍相、内田康哉外務相の三大臣、英国大使マクドナルド卿、仏・露・米各大使、徳川圀順上院議長、阪谷芳郎東京市長、菊池大麓、益田孝、団琢磨、大蔵喜八郎、福沢捨次郎、ジョサイア・コンドルといった顔ぶれから、政財界に繋がる彼の人脈が浮き彫りとなる⁽³⁷⁾。訃報には、日本の「紹介」、「理解者」、「功労者」、「恩人」、「日本最良」といった表現が多く散見される⁽³⁸⁾。プリנקリーは日本に寄り添い、日本人から厚い信頼を寄せられた。しかしその一方で、祖国英国人のコミュニティーからは敵対視され、日英の評価は相反していた。

彼の日本寄りの姿勢は、居留地に住む欧米人の一般的な感覚からかけ離れたものであり、とりわけ英国人の目には極端な「日本最良」と映り反感を買ったという⁽³⁹⁾。多くの英国人によるプリנקリー批判は、彼の評価に深刻な影を落としていた。アーネスト・サトウ⁽⁴⁰⁾ (Sir Ernest Mason Satow, 1843-1929) は、1900年3月5日、G.E. モリスンとの討論でプリנקリーについて次のように述べた。「私は、プリנקリーが心情的に外国人居留者に反対する気持ちが強く、日本寄りであることは確かだが、この問題をチロルと話し合ったとき、彼こそ日本を知悉している点においてタイムズの特派員としての資格のある唯一の人物であり、彼の日本寄りの傾向を知っての上でその文章を読む限りにおいて、何ら問題はないと意見を述べた。そして彼がある事件の日本政府側の解釈、例えば昨年夏の清国使節の件を新聞に書いたときでも、タイムズ紙には実際の事実を書き送っているのだと言った⁽⁴¹⁾。」これは、高度な日本語力と公正さに定評のある外交官サトウならではの評価であり、もっとも中立的なものと云えよう。

2. プリンクリー・コレクションの肥前磁器

静嘉堂文庫美術館の陶磁器コレクションのうち、プリンクリー旧藏品を含む江戸期製作の肥前磁器のコレクションは、79作品が1997年に同館が開催した展覧会「伊万里展 ― 肥前色絵磁器の世界 ―」で本格的に紹介された。プリンクリー旧蔵伊万里焼コレクションの存在が初公開されたのは、1997年の静嘉堂文庫美術館学芸員長谷川祥子氏による『陶説』掲載論文「静嘉堂所蔵の伊万里 ― プリンクリー旧藏品とのかかわりについて ― ⁽⁴²⁾」によってである。さらに2008年には、同館所蔵の肥前磁器84作品が古伊万里展で公開されるとともに、図録『静嘉堂蔵 古伊万里 ⁽⁴³⁾』に掲載された。

静嘉堂の創設者である岩崎彌之助（三菱第二代社長、1851-1908）は、明治維新後、国内の美術品が旧来の所持者の手を離れて海外へ流失してゆくのを抑制しようとする動機から、明治20～30年代にかけて熱心に蒐集活動を行った⁽⁴⁴⁾。プリンクリーのコレクションの大半は、岩崎家別邸の一つである東京深川の清澄園に納められた。清澄園は、三菱社員の親睦会を催し、あるいは賓客を接待する場所として造営され、日本風、西洋風、両方の建築様式による複数の建物から成る。英国の建築家ジョサイア・コンドル⁽⁴⁵⁾の設計になる西洋館は1889（明治22）年、その別棟として翌年に「八角堂」が完成した。そしてこの「八角堂」の北側部分に位置する陳列室には陶磁器を陳列するための棚があり⁽⁴⁶⁾、プリンクリー・コレクションはこの陳列室の棚に陳列されていた⁽⁴⁷⁾。プリンクリー・コレクションの概要は、奥田誠一により『清澄園蒐集陶磁器目録』（大正12年8月）にまとめられた。そこには中国陶磁172件と日本陶磁289件、計461件の作品が収録されている⁽⁴⁸⁾。その後清澄園の日本館ならびに西洋館は関東大震災による火災で焼失。幸い陳列室を含む「八角堂」は被災を免れ、現存するコレクションの一部が静嘉堂に移され、現在も静嘉堂文庫美術館に所蔵されている⁽⁴⁹⁾。

岩崎家の陶磁器が全て八角堂に陳列されていたかは不明であるが、コレクション数をふまえば最大461件の陳列が可能であったことになる。磁器の陳列室は西欧の城には多数実在するが、日本には類例が現存せず、過去に遡っても存在が確認されていない。磁器のための陳列室を日本で建設するという発想

は一体何処から来たのだろうか。

ベルギー公使夫人エリアノーラ・メアリー・ダヌタン (Eleanora Mary d'Anethan, 1859-1935) は岩崎家清澄園を訪問した時のこととして1904 (明治37) 年10月7日の日記に次のように記している。「西洋館には美しい美術品が数多く収蔵されており、プリנקリー大尉がシナ陶器の優れた収集品を岩崎家へ三万円 (三〇〇〇ポンド) で売ったという話である。私の聞いたところでは、もしそれをアメリカで売ろうとすれば、もっとずっと高い値で売れるのだが、プリנקリー大尉はこのような収集品はぜひ日本の国内に残しておくべきだと考えたのであって、それは彼が極めて公共心に富んでいたことを示すものである⁽⁵⁰⁾。」加えて、ダヌタン夫妻の邸宅はプリנקリー邸の近所にあり、プリנקリーと交友があった⁽⁵¹⁾。ゆえに彼女の言説はプリנקリーから直接の伝聞である可能性が高い。以上の点をふまえると、プリנקリー自身が岩崎彌之助に陶磁器コレクションの購入を持ち掛けた可能性も考えられるのではないかな。

また、多数の陶磁器を陳列室の棚に陳列するという発想は、正に17～18世紀西洋の王侯貴族の間で流行したいわゆる磁器陳列室の感覚に近い。そうした陳列はイギリス国内に存在するが、それほど多いわけでもないため、磁器陳列室の建設は建築家にとってオーソドックスな発想ではない。このように考えると、陳列室建設の発想は、建築家コンドルの着想というよりも、西洋王侯貴族の東洋磁器収集に精通したプリנקリーからの影響によるものと考えるのが自然ではないだろうか。前述のとおり、プリנקリーは貴族出身であるため、西洋の宮殿の内部装飾にも精通していたはずである。彼が茶陶でなく色絵の陶磁コレクションを多数所有していたのであれば、自邸の洋館に陳列棚を設置し陳列していた可能性が高いと思われる⁽⁵²⁾。推測の域を出ないものの、岩崎彌之助が陶磁器を購入した際には、彌之助かその関係者がプリנקリー邸でコレクションを実見したうえで購入したことも想定できよう。岩崎家側がプリנקリー邸の陶磁器陳列から影響を受けた可能性は推測の域を出ないものの、コレクションが購入されるに至るまでの経緯が清澄園の陳列室誕生へと導く一因となった可能性があるのではないだろうか。

静嘉堂文庫美術館が所蔵する肥前磁器には、底面などに紅色の装飾枠内に番号を書き込んだシールが貼られた作品があり、このシールを伴うものがプリン

クリー旧蔵品として識別されている。このシールが付された肥前磁器は『静嘉堂蔵 古伊万里』掲載品に合計25点確認できる（ジャンル別の内訳は、古九谷様式1点、柿右衛門様式4点、鍋島2点、金襴手様式17点、その他1点である）。ブリンクリー旧蔵品のなかでも、特に重要美術品をふくむ金襴手様式や柿右衛門様式の作品群の質の高さは注目に値する。また、ブリンクリーは自ら、コレクションの大部分は幕府崩壊直後の5年間に主に大名をはじめ武家社会からの流出品を購入したものであり、蛸川式胤からも多数の陶磁器の優品を購入したと述べている⁽⁵³⁾。

ブリンクリー・コレクションの肥前磁器は、江戸期から日本に伝来するタイプの、つまり西洋向け輸出品とは異なる特徴をもつ金襴手様式磁器が大部分を占める事を特色とする。金襴手様式17点のうち、14点が国内向けタイプの装飾を伴う鉢と皿⁽⁵⁴⁾、3点が典型的な西洋輸出品タイプの大皿・大鉢である⁽⁵⁵⁾。後者はブリンクリーが輸出磁器を研究するために西洋から取り寄せ入手したものと推測される。今日わが国に伝わる肥前磁器のうち、江戸期まで伝来をさかのぼることが実証できる作例は極めて稀少である。そのためブリンクリー旧蔵品は、日本市場向け肥前磁器の基準作を取り揃えた一群として高い歴史的価値を有するものと云える。そしてこの日本向けの金襴手様式磁器を軸とした収集品の性格は、後述の『陶磁芸術』で表明された彼の肥前磁器研究にあますところなく生かされている。

3. 『陶磁芸術 KERAMIK ART』

3-1 概要

『陶磁芸術』は、Oriental Series: Japan and China という日本と中国の文化、芸術、歴史に関する12巻シリーズ『日本と中国：その歴史、芸術と文学 JAPAN and CHINA: Its History, Arts and Literature』（1901～04年刊）の第8巻に所収されている。このうち日本を扱った1～8巻の原題は『JAPAN: Its History, Arts and Literature』（『日本：その歴史、芸術と文学』）、中国を対象とした9～12巻の原題は『CHINA: Its History, Arts and Literature』（『中国：その歴史、芸術と文学』）である。繰り返しになるが、『陶磁芸術』はこの前者に所収される。

日本に関する巻の内容は、第1巻が日本の歴史（古代～平安）、第2巻が戦国時代の歴史と文化、武士道等、第3巻が戦国時代の文化、「徳川時代」の歴史、第4巻が「徳川時代」の文化、犯罪、哲学や教育等、明治時代、第5巻が明治時代の経済、外交、身分制度、宗教等、第6巻が祭り、娯楽、経済史等、第7巻が絵画、応用芸術、ブロンズの鑄造、刀装具、置物等、そして第8巻は「陶磁芸術」と題し、日本陶磁史に全頁を割いている。ちなみに前述の中国に関する9～12巻目中第9巻も中国陶磁史専用の巻としている。本シリーズでは各巻に複数のテーマが取り上げられているのに対し、陶磁史のみが日中の巻ともにそれぞれ独立し、プリנקリーの関心の中心が陶磁器にあることを強く印象づける。『陶磁芸術』の発行部数は8000部を超える⁽⁵⁶⁾。

『陶磁芸術』は本文450ページと付録から成る（図版21点付）。章立てを以下に挙げる（拙訳）。

第1章 初期のやきもの	p. 1
第2章 肥前焼	p. 39
第3章 薩摩焼	p. 131
第4章 京焼	p. 173
第5章 加賀焼	p. 236
第6章 尾張・美濃焼	p. 261
第7章 様々なやきもの	p. 307
第8章 日本陶磁の近代的発展	p. 411
付録（索引・銘款リスト）	

日本陶磁を通史的に取り上げ、各章の主題を成しクローズアップされるのは色絵付を施す華やかなタイプの磁器と陶器（肥前焼、薩摩焼、京焼、九谷焼、瀬戸焼、美濃焼）であり、所謂「鑑賞陶磁」に重きが置かれている。本書の解説文章は極めて詳細で、切り口が各窯の歴史、材料の科学分析、美術史的分析と多岐にわたり、縄文時代に始まり近世陶磁を中心に明治期の現代陶磁までを通史的に取り上げている。各章ごとの概要は紙面の都合によりここでは割愛するが⁽⁵⁷⁾、そのページの配分をみても「第2章 肥前焼」は92頁分と群を抜いて充実し、本書の最も中心的なテーマであることがわかる。本稿では、この「第2章 肥前焼 Ware of Hizen」に焦点を当てる（本章では肥前地方で焼かれた磁器（肥前磁器）を肥前焼として取りあげている）。

本書が刊行された1901年以前までの欧米の文献を概観すると、代表的な著作は陶磁史を通史的に捉えるものが多い⁽⁵⁸⁾。また、当時の欧米の日本陶磁研究の主題は専ら茶の湯を中心とする陶器であった。肥前磁器について多くの紙面を割き専門的に解説することは、欧米では前例のない試みであった。

その後1965年、イギリスの日本陶磁史研究家ソーム・ジェニンスが日本磁器のみに焦点を当てた史上初の研究書『日本磁器 *Japanese Porcelain*⁽⁵⁹⁾』(1965)を出版した。同書が明治期に日本磁器を扱った代表的なイギリスの文献として名を挙げたのは、オーズレイ (George Ashdown Audsley, 1838-1925) とボウズ (James Lord Bowes, 1834-1899) の著書『日本の陶磁芸術 *Keramic Art of Japan*⁽⁶⁰⁾』(1881年刊) とプリנקリーの『陶磁芸術』のみであった。ジェニンスは1904年刊の本書に依拠しながら「古い文献では Brinkley の『日本：その歴史、芸術と文学』が欠かせないが、フォルカー [Tijs Volker, 1892-1979 (筆者の補足)] は『彼には注意して接するべきである』と述べた。このシリーズの第8巻は日本の陶磁器について書かれている。1904年に書かれたものである。ハニー [W.B. Honey⁽⁶¹⁾, 1889-1956 (筆者の補足)] が『このテーマについてさらに知りたいと読者に思わせるようなものではない』と断言しているが、英語で書かれたこれらの陶磁器の一般的な説明としては、今でも群を抜いている⁽⁶²⁾」(拙訳) と評した。フォルカーとハニーの批判的なコメントは具体性に乏しくフェアでない。プリנקリーが例として挙げる日本の国内伝世品にはそれに対応する図版がないうえ日本国内伝世品の存在が西欧では当時ほとんど知られていなかったため、フォルカーやハニーには難解であったのかもしれない。また、プリנקリーの熱狂的な日本賛美に対する——西欧至上主義者的感覚に立脚した——嫌悪感に根差す感情論もあるかもしれない。しかし、彼らとは対照的にジェニンスは『陶磁芸術』を高く評価した。

3-2 「第2章 肥前焼」にみる肥前磁器研究

ここでは主に以下20のトピックについて論じられている⁽⁶³⁾

- a. 肥前磁器の貿易
- b. 朝鮮人陶工が日本に伝えた朝鮮陶磁
- c. 肥前国に渡来した創成期の朝鮮人陶工
- d. 酒井田柿右衛門による色絵磁器の完成とオランダ向け輸出

- e. 科学分析に基づく材料の組成
- f. 17世紀の有田焼に及ぼされたオランダの影響
- g. 18世紀の伊万里焼又はオールド・ジャパン⁽⁶⁴⁾と呼ばれた磁器
- h. ドレスデンのコレクション
- i. デルフト・ファイアンスによる有田焼の模倣
- j. デルフト・ファイアンスの輸入
- k. 柿右衛門様式磁器と鍋島の比較
- l. 装漆飾の長崎焼
- m. 鍋島焼
- n. 平戸焼
- o. 卵殻手
- p. 有田陶工の家系
- q. 亀山焼
- r. オールド・ジャパン、金襴手様式磁器、鍋島との比較
- s. 染付磁器
- t. 貫入
- u. 明治期の有田磁器

次に、「第2章 肥前焼」を前掲のトピックごとにまとめた抄訳を掲載する。なおかつ、特に重要な内容については、抄訳文の後の【 】内に「筆者考察：」と記し、筆者の考察をつけ加えた。

3-2-a 肥前磁器の貿易

ケンペルの『日本誌 *The History of Japan*⁽⁶⁵⁾』に基づき、ポルトガル人が16世紀に初めて九州を拠点に日本と貿易し、金や銀を輸出したとする。16世紀初頭には中国から帰国した五郎太夫と呉祥瑞が鄱陽湖⁽⁶⁶⁾から持ち運んだ材料で染付磁器を焼いたが、短期で廃窯となった⁽⁶⁷⁾。ポルトガル貿易の時代には、西洋人が求める磁器は日本で生産されていなかったと述べる⁽⁶⁸⁾。

3-2-b 朝鮮人陶工が日本に伝えた朝鮮陶磁

祥瑞が有田で生産した磁器のほか、有田で焼かれていた陶磁器は唐津焼であったが、芸術的な域に達するものではなかった。豊臣秀吉による朝鮮出兵が

行われた16世紀末以降、朝鮮人の陶工が九州の9つの国に居住させられたとする。彼らが日本の窯業に与えた影響を明らかにするため、朝鮮で同時代に生産された陶磁器の特定を試みている。日本に所在する中国か朝鮮かの区別が明確でない多数の古陶磁の存在を問題視し、西洋で「ブラン・ド・シン⁽⁶⁹⁾」と呼ばれる白磁を例に挙げ、象牙のような白さと透明感のある高級磁器と称す。これを4世紀前より日本の識者が朝鮮製と称していたことを指摘。蜷川式胤を初め多くの同時代の専門家も同様の見解であったという。彼らが徳化窯白磁を朝鮮製と判断する根拠は『景德鎮陶録』にあるとし、これに対しプリンクリーは疑問を呈す⁽⁷⁰⁾。

日本人が朝鮮製と誤認した中国陶磁のもうひとつの例として、白高麗を挙げる。プリンクリーは、定窯の白磁と白高麗の白の色合いの違いを比較し、定窯白磁は独特のクリーム色、白高麗はピンクや象牙色のような色と表現し、結果、白高麗は明時代の建窯か中国の「象牙色の白」だと分析した⁽⁷¹⁾。第2の朝鮮陶磁として青磁を挙げる。青磁には中国製と松島等で15～16世紀に生産された朝鮮製がある。両者の区別は容易であり、朝鮮の釉薬はより薄いとする。第3の例は、高麗の陶器である。三島、御本手、井戸、真熊川、半使、古伊羅保などの茶陶を挙げ、日本人は製品のもつ美しさや卓越性よりも伝統や連想を重ねる傾向があると分析した⁽⁷²⁾。

(筆者注：抄訳文中の下線は筆者の加筆。後続の抄訳文中の下線も同様。)

3-2-c 肥前国に渡来した創成期の朝鮮人陶工

祥瑞の死後16世紀末までの歴史的空白を経て、百間窯が誕生した。その後1620年に高原五郎七が肥前に入国し、承天寺和尚の計らいで柿右衛門窯に雇われ、柿右衛門とともに泉山の陶石場を発見したという伝承がある。これに基づき真の磁器の製造開始を1625年とするという説があるとする。しかし、より信頼のおける他の権威はこの説を偽書とし、百間窯で働いていた李参平ら4人の陶工が1605年頃泉山を発見したとする。その証拠に百間窯から日本製の真の磁器片が発見されている。泉山の発見後、百間窯は閉鎖され、陶工は有田に移された⁽⁷³⁾。

中国は磁器の材料にカオリンと白丕子⁽⁷⁴⁾を混ぜるのに対し、泉山の陶石は単独で用いられる。また、有田の陶石は西洋で認識されている磁器材料とは異

なることが近年判明したとする。通常西洋の磁器の素地は、シリカ46.33%、アルミナ39.77%、その他13.9%で構成されている。しかし、ヴルツ Wurtz⁽⁷⁵⁾教授が分析した有田の素地の8つの標本のうち、これにほぼ一致する結果が得られたのは1標本のみで、7標本は74.5～82.3%のシリカ、12～19%のアルミナ、1～3.7%のその他の物質が含有されていた。8番目の小樽山産の標本だけが、シリカ49.9%、アルミナ38.7%、その他7.6%を含み、西洋の磁器土の構成に類似していた。これらの数値から、ヴルツは肥前の磁器はカオリンを含まず、白土子を成分とするものと結論づけた⁽⁷⁶⁾。

初期の製品は中国の見本に倣い、染付で装飾された質の低いものであった。これらはポルトガルやオランダとの貿易が行われていた頃の製品であるが、輸出されることはなかった。有田焼は出荷港の名にちなみ伊万里と呼ばれた⁽⁷⁷⁾。

3-2-d 酒井田柿右衛門による色絵磁器の完成とオランダ向け輸出

色絵の完成者として酒井田柿右衛門と東島徳右衛門の名を挙げる。彼らは1646年に長崎で、中国の役人から情報を得ようとした。中国人の役人は、柿右衛門がすでに知っていた赤や緑の上絵具の調合と絵付の方法を説明したが、金や銀その他の色の使用については情報が得られなかった。柿右衛門の活躍期以前に明の色絵は日本に輸入されていた。柿右衛門および徳右衛門の時代に日本で親しまれていたのは、特に隆慶時代〔1567-1572〕と万暦時代〔1573-1619〕の製品であった〔抄訳文中の〔 〕内の記載は筆者による補足である。以下同様〕。現在〔1900年頃〕日本の専門家の100人中99人が、中国の代表的な上絵の磁器は万暦赤絵であると考えている。しかし、有田の陶工たちは、菱形文様⁽⁷⁸⁾や赤と緑の絵具がふんだんに使用された万暦赤絵を模倣するのではなく、上絵を控えめにし、丁寧な絵付けと洗練されたモチーフで装飾した。素地は繊細で純粋で、柔らかくマットな乳白の釉薬 milk-white glazeは、装飾とよく調和した。上絵具は、透明で色調豊かであるが色数は少なく、マットな赤、オレンジ色を帯びた赤、草緑、ライラックの青〔紫〕が用いられる。装飾モチーフとしては、花の丸文様を主体とし、龍、鳳凰、竹、梅、松、トウモロコシ〔粟の意か〕の束に飛び交う鳥、その他の自然主義的な題材、そして様々な種類の菱形文様などが常に描かれている。モチーフは数か所に限定してほどこされ、広い余白が設けられている。こうした清楚なスタイルは柿右衛

門と称され、子孫に代々受け継がれた⁽⁷⁹⁾。

【筆者考察：静嘉堂文庫美術館蔵ブリンクリー・コレクションには「色絵秋草文八角瓶」(図17*⁽⁸⁰⁾)、「色絵団龍文蓋物」(図22*)、「色絵孔雀牡丹文輪違透小鉢」(図23*)という3点の柿右衛門様式磁器がある。これらはどれも余白を広く取り、赤・青・緑・金の上絵により花鳥などの和様の文様や龍を上絵具で描き、釉は乳白色を呈す。その器形は蓋付壺や大鉢、人形といった典型的な輸出品とは異なり、国内用製品に多くみられる小型の器である。「色絵団龍文蓋物」および「色絵孔雀牡丹文輪違透小鉢」は、大正期から戦前までに刊行された売立目録に掲載されていることから国内向けの製品と考えられる⁽⁸¹⁾。鶴首瓶である「色絵秋草文八角瓶」の類品は英国王室にも所蔵される極めて上質な作例である。本作は、西洋に江戸期から伝わるコレクションの多くの鶴首瓶と比べより古風な、輸出磁器として様式化が進む以前の和様の気風を醸している。これら3点の柿右衛門様式磁器の特徴は、本節の説明と矛盾がないと思われる。】

3-2-e 科学分析に基づく材料の組成

陶石の材料の組成は、ワグネル Wagner⁽⁸²⁾博士とヴルツ教授の研究に基づいて詳細に説明されている。主に辻土、白土、サカイメ土、クダル土、青磁土、白川土などの名が挙げられる。また、石の粉碎、水簸、乾燥、轆轤による成形、削り、素焼き焼成、染付の絵付けのプロセスが説明される。染付には、明治以前は中国のコバルトを含むマンガ、つまり呉須が用いられていたが、現在[1900年頃]はスマルト[花紺青]が使用されているとする。中国産コバルトの組成については、東京医科大学の化学教授であったアイクマン [Johan Fredrik Eykman⁽⁸³⁾, 1851-1915] 博士、東京大学の松井博士、M.サルヴェタット Salvetat による分析結果に基づき説明がなされる。施釉、本焼、窯の構造についても解説される。日本の製陶は単純な道具で行われ、陶工たちは高度な技術力と芸術性を備えているにもかかわらず、その賃金は一般労働者より低い。焼成窯が小さいため生産性が低いとする。さらに、エーベルマン Ebelman とサルヴェタットは、化学と物理に関する著名な論文において、中国の磁器とヨーロッパの磁器の間には、技術的に大きな違いはないという結論に達したとする。さらに、この結果を M. コルシュルト Korschelt および M. パ

ボット Pabot、コルシュルト・松井・ヴルツ等の研究結果と比較し、検証している。最後に色絵の上絵の具に含有される金属物質やガラス、白鉛といった材料についてもコルシュルトの科学分析に基づき具体的な薬剤名を挙げて説明している⁽⁸⁴⁾。

【筆者考察：化学分析の結果を批判的に検証する姿勢は、当時の西洋の日本陶磁研究書には全く前例のない本格的な手法である。明治時代の陶磁史研究において、科学的根拠に基づき陶磁材料の解説ができる人物は、工学系の高等教育を受けたプリנקリーをおいてほかにいないのではないだろうか。陶磁史に化学の成果を取り入れた総合性は評価に値する。】

3-2-f 17世紀の有田焼に及ぼされたオランダの影響

オランダ製陶磁器は装飾過多で低俗な趣味だとする。こうした傾向があるオランダでは、柿右衛門風の装飾の磁器は売れないはずだとする。ところが、偶然にも出島のオランダ商館には豊かな発想力とデザインの知識のある人物がいたとし、例としてジャックマールがその著書⁽⁸⁵⁾で引用したモンタヌスの『東インド会社遣使録 *Les Ambassades Memorables*⁽⁸⁶⁾』の一節を挙げる。それはワーヘナール⁽⁸⁷⁾が考案し、有田に注文した「青地に花 *fleur sur un fond bleu*」を描いた磁器の美しさが評判となり、彼が発注した200枚のこの装飾の磁器が即座に完売したというエピソードである。一方、イギリスの G.A. オーズレイ & J.L. ボウズの著書⁽⁸⁸⁾では、この花の文様は「サンザシ文様」と説明されているとする⁽⁸⁹⁾。この説に対しプリנקリーは、サンザシは中国の植物であるため、サンザシが描かれた器は日本に存在しないと反論した⁽⁹⁰⁾。

3-2-g 18世紀の伊万里焼又は「オールド・ジャパン」と呼ばれた磁器

オランダの影響を受け、西洋の愛好家の間で「オールド・ジャパン」、日本人自身からは「錦手」や「金襴手 Brocade pattern」と呼ばれ親しまれている「伊万里焼」が誕生した。この種の作は装飾の豊かさと濃厚な色彩を特徴とし、上質の素地を用いながら上絵のための2回目の焼成により、柔らかさや純粋さが失われているとする。日本人自身は、「華麗なる時代」[1655~1710年]の50~60年間に有田の陶工たちが最も好んでデザインしたのは「花籠手」であると考えている。花籠手は無限の変形が可能であり、どのような形のスペース

にも対応できるようになっている。また、有田の磁器の文様は、染織、漆工、刺繍、金工などの分野に既存の文様を用いることができる。陶工たちは漆、錦あるいは金襴に表された菱形文様、唐草文様、花のモチーフ、神話の奇想などの華麗な多くの文様を手本に組み合わせればよかった。この新しいデザインは「金襴手」と呼ばれた。装飾文様としては、人物は珍しく、花文様、唐草文様、菱形文様に加え、鳳凰、龍、麒麟、獅子、丸文や窓絵に描かれた山水画が中心である。晴れ着を着た女性や鎧をつけた戦士が描かれることもあった。オランダ人はこれを大量に輸出したが、有田の窯業は家内工業であるため供給量は限られていた。オランダ人の輸出磁器は中国製品が支配的であったが、それらの混在がその後のヨーロッパの愛好家の混乱を招いた。また、オランダ人が日本で手に入れた作品の中には、外国からの悪影響を受けたものと分析している⁽⁹¹⁾。

【筆者考察：静嘉堂文庫美術館には、プリンクリー旧蔵の花籠手の大鉢1点⁽⁹²⁾が所蔵されている。このタイプの製品は西洋向けと考えられる。さら



図2 色絵梅草花文瓢形瓶 ドレスデン国立美術館磁器コレクション館所蔵 PO5426 ©Porzellansammlung, Staatliche Kunstsammlungen Dresden, Foto: Adrian Sauer

に、同館のプリンクリー・コレクションには典型的な西洋向け輸出品の大皿2点⁽⁹³⁾も含まれている。しかし、典型的な輸出品タイプの金襴手様式磁器が江戸期より我が国に伝世したことを示す作例は、管見の限り未確認である。よって、プリンクリーが「オールド・ジャパン」の学習のために西洋から取り寄せたものと推測される。】

3-2-h ドレスデンのコレクション

G.A. オーズレイ & J.L. ボウズ両氏の『日本の陶磁芸術』に図版掲載され肥前製として解説された、ドレスデンの王室の磁器コレクションにある三段の瓢形瓶⁽⁹⁴⁾〔図2〕を挙げる。プリンクリーは瓢箪を三段に表すこと自体が日本美術の規範から逸れ、怪しげだと述べている。この形状を日本の細工人が発想し

たとするボウズ等の説に疑問を呈し、装飾も違和感があると述べている。また、これ以外のドレスデン蔵品の大型蓋付壺の装飾には、このように違和感を覚える作品はないと指摘している⁽⁹⁵⁾。

【筆者考察：プリנקリーは、日本の意匠に関する一般的な常識に基づいて、この瓢形瓶を日本製とするボウズ等の説を痛烈に批判したのである。実はこの瓢形瓶は、現在では伊万里風の絵付けがほどこされた景德鎮の製品であることが判明しており、プリנקリーの見解は妥当なものといえる。】

3-2-i デルフト・ファイアンスによる有田焼の偽造

デルフト・ファイアンスによる、赤青金で絵付けされた「オールド・ジャパン」の偽造が行われていたことについて説明している。写しを製作したのは天オエルブレフト・デ・カイザー Aelbregt de Keizer であり、オランダでその写しの美しさが絶賛された。「しかしながら、魅力的な作品の軽さ、繊細さ、精巧さ、そして特にその装飾の見事なまでの優雅さまでは写し得なかった」と述べるヘリット・パーペ [Gerrit Paape, 1752-1803] の言説をプリנקリーは高く評価している⁽⁹⁶⁾。

3-2-j デルフト・ファイアンスの輸入

デルフト・ファイアンスで日本向けに特別に作られた製品は、オランダ人により日本へ運ばれた。それは、日本の茶の湯愛好者の間で受容され、その100年後には京都でその写しが製作されたとする。ケンペルによれば、17世紀後半の出島からの磁器の年間輸出量は約100俵である。ドレスデンのコレクションは1698年から1724年にかけてアウグスト二世によって集められたことが知られている⁽⁹⁷⁾。全体として、日本の陶磁器製品は18世紀半ばまでヨーロッパに少量ずつ出荷されていたと考えられると、プリנקリーは説明する⁽⁹⁸⁾。

【筆者考察：17世紀末以降幕末以前の有田磁器の西洋向け輸出の期間の下限は、輸出が主に私貿易によって営まれていたため貿易史料からは判断できない。一方、現在の考古学的手法による編年に基づけば、江戸期から西洋に伝世することが明らかなコレクションの生産年代の下限は18世紀中頃までと判断できる。よって、下線部の見解は妥当である。】

3-2-k 柿右衛門様式磁器と鍋島の比較

18世紀半ばには工房の数は20に増え、1799年刊『山海名産圖會』によれば、当時も上絵付けは赤絵町で集中して行われていたという。製造開始から半世紀の間、上絵具はごく稀な例外を除き青、赤、緑、金に限られ、青は主に染付であった。しかし、次第に上絵具のライラックブルー〔紫〕、茶褐色、紫、黒、レモンイエローが加わり、最後の3色は最も優れた製品に使われたとする。

また、「柿右衛門の焼物、あるいは彼の流派の焼物には乳白 cream-white の表面が認められ、時には朝鮮や中国の象牙色 ivory-white の白に近いものもある。しかし、この種のものは、本物の伊万里焼又は『オールド・ジャパン』ではなく、鍋島焼に属するものである。後者の素地も、白ければ白いほど良いのであるが、完全な純白は滅多にない。青みを帯びた表面は上質ではなく、青みが強ければ強いほど標本の価値は下がると言えるだろう。」「景德鎮のファミリー・ローズ磁器を除いて、日本製のほとんどすべての作品に見られるような、繊細で忠実な装飾を施した中国製品はないと断言できる。皿などの平らなものの場合に有効な大まかなルールとして、日本製の磁器の底には、炉の中で標本を支えていた小さな粘土の柱の跡である「目跡」が3～5個あることが多い。これは中国の磁器には見られないものである。」とプリנקリーは分析した⁽⁹⁹⁾。

【筆者考察：プリנקリーは、柿右衛門様式磁器の素地は基本的に乳白色であり、象牙色に近い場合もあるとし、柿右衛門様式磁器および鍋島焼の素地の色には共通性があることを指摘した。】

3-2-1 装漆師の長崎焼

有田で磁器に漆装飾が施され始めたのは1858年以降のことであり、その後有田の陶工は米・蘭・英・仏の来日外国人達の低俗な好みに迎合する漆装飾作品が製作された。窓絵の周りに黒漆をほどこし、その上に赤や金で唐草文様等を絵付けした「長崎焼」と呼ばれた磁器である。これらは極めて悪趣味なもので、大量に欧米に輸出されたが、無知な人々のあいだで日本の初期の陶磁芸術の真の代表として受け入れられた⁽¹⁰⁰⁾。

3-2-m 鍋島焼

大川内山周辺の地域では、まず初め広瀬山で陶器が焼かれ始めた。その後一

ノ瀬にも有田から陶工が移り住み、広瀬と一ノ瀬で粗製磁器の生産が開始された。その後、鍋島藩主が1660年頃広瀬と一ノ瀬の最も良い職人を集め大川内山に開窯した。この窯は「御道具山」と呼ばれ、添田喜左衛門が責任者を務める。この山への立ち入りは統制された。鍋島焼は純粋に日本人の趣味に基づくものであり、装飾が少なく質素で繊細である。また、「作品の装飾は伊万里焼に比べて少なく、全体的に質素で繊細な特徴を持っている。その釉薬は「オールド・ジャパン」のものよりもきめ細かく白く、異物の混入も少ないが、中には赤みの強いものもある。釉薬の純度と光沢にも特徴がある。伊万里の磁器に見られるような微細なピンホールはあるが、鍋島はより表面のざらつきが少ないことがわかる。鍋島の磁器の最大の特徴は、釉下彩の青〔染付〕の装飾の格が下がり副次的な位置を占めていることである。実際、釉下彩の青はまったく使われず⁽¹⁰¹⁾、絵付けはガラス質の上絵具で描くか柿右衛門の作風を忠実に踏襲するものも多い。一般的にこれには、コバルト化したマンガンが僅かに使用されるが、これは有田の陶芸家のものとは明らかに異なる方法で作られている。色調は淡く繊細で、青の唐草文様が装飾の主役となっている作品でも、伊万里の色のような濃厚で重厚な効果は見られない。」などと分析した。また、絵柄は、花や唐草文様、菱形文様などに限定され、一般的なのは、桜の枝や花、菊、紫陽花、牡丹などである。花だけでなく葉を散りばめたものもあるとする。原則的に銘を記さないこと、櫛歯文〔図3〕、大河内で焼かれた青磁⁽¹⁰²⁾についても言及している⁽¹⁰³⁾。

【筆者考察：高台側面の櫛歯文の説明として掲載された図3の作例の見込の絵付け文様は、『静嘉堂蔵古伊万里』図録に図69*として掲載されたプリנקリー・コレクションの「色絵菊柘榴文台鉢」と同一である。両者の見込は共通して、中央を

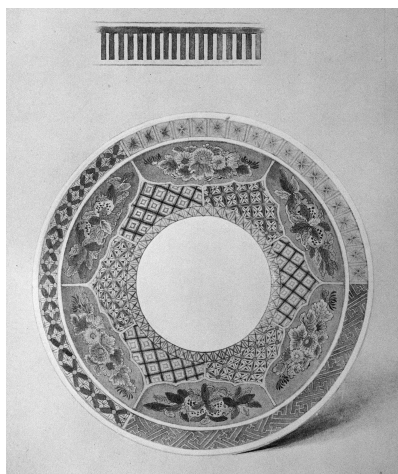


図3 色絵花柘榴文皿 鍋島焼
(出典：F. プリנקリー著『陶磁芸術』
神田外語大学附属図書館所蔵)

白抜きし、周囲に花菱格子と七宝繫ぎを配す。立ち上がりは六分割し、菊文と柘榴文を交互に配し、口縁三方にそれぞれ七宝繫ぎ、格子、紗綾形の文様を描く鍋島のデザイン構成を示す。ただし脚部（または高台）が異なる。図3では、櫛歯文の高台が図示されているが、『静嘉堂蔵古伊万里』図録の「色絵菊柘榴文台鉢」では、宝珠を描いた如意頭形窓絵を中心に唐草文様を描いた金襴手様式のデザインで絵付けした脚部が底面に取り付けられている。そのため、同図録で本作例は金襴手様式に分類されているが、見込と脚部の絵付けの様式に乖離がある。「色絵菊柘榴文台鉢」に取り付けられた脚部は、高台が破損により失われたために加えられた後補ではないだろうか。静嘉堂美術館所蔵「色絵菊柘榴文台鉢」は、元は櫛歯文の高台をとまなう鍋島の色絵菊柘榴文大皿であった可能性がある。】

3-2-n 平戸焼

三川内焼の創始として、今村家について特筆している。1751年には、平戸藩主松浦氏がこの窯の庇護を始め、1750年から天保年間〔1830～1843年〕まで三川内で焼かれたものは、日本の磁器の中で第一位の地位を占めている。三川内で生産された作品は、藩主が使用するか、他の領主に贈答するか、あるいは江戸の徳川家の宮廷に献上された。そのため三川内焼は「献上物」と呼ばれた。松浦は、領内で最初の窯を開いた中里家と今村家を特に優遇したという。この平戸焼は、鍋島焼や伊万里焼よりもきめが細かく、純度が高く、色も白い。また、美しい平戸焼の素地は乳白 milk-white で、クレーパーの粘土のようにきめ細かい。また、三川内焼の特徴は非常に繊細に仕上げられたレリーフなど、彫刻的な細工の素晴らしさである〔図4〕。さらに、創業者である今村家、樋口家の家系の一覧も掲載している⁽¹⁰⁴⁾。

3-2-o 卵殻手

海外のコレクターの間では、有田の卵殻手磁器ほど有名な日本の焼き物はない。正確な製造開始時期は不明であるが、18世紀後半以前には製造されていなかったと考えるのが妥当だとする。一般的な装飾は、鎧をまとった武人や、遊女などの人物文が多い。肥前の染付卵殻手磁器は有田の窯で作られたとされているが、ほとんどが三川内で作られたものである。もとは有田で製造されてい

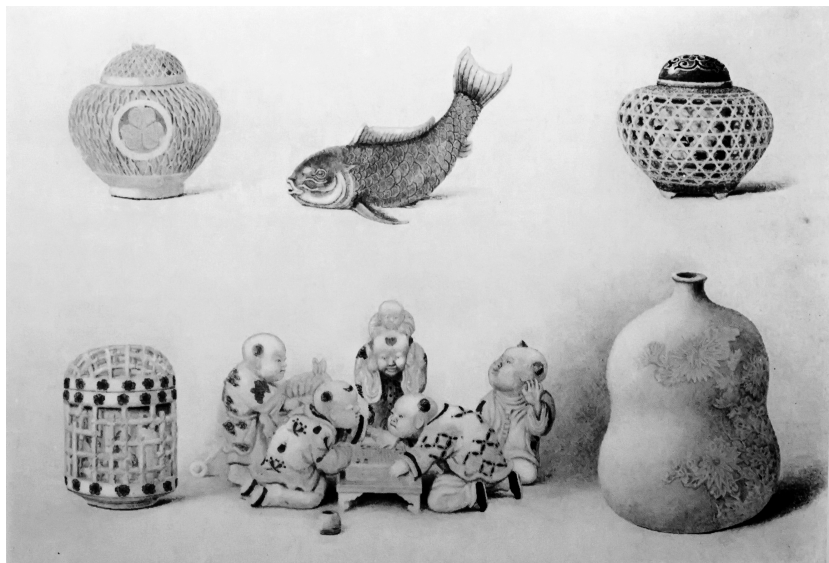


図4 平戸焼各種

(出典：F. プリンクリー著『陶磁芸術』 神田外語大学附属図書館所蔵)

たものもあったと思われるが、泉山の石はその目的には適さなかった。見事な編み込みのある籠細工「網代組」で包んだ製品もある。覆いは長崎で製造されたもので、盃は通常3個、5個、または7個で重ねて一組にして販売された。有田で発生した1820年の大火災後、陶工たちは窮地に陥り、その打開策として磁器商人の久富与次兵衛の一派が海外輸出向け磁器の製造を提案した。その後、久富が三川内に輸出用の卵殻手の製作を薦めたことをきっかけに、外国人に良く知られる青と白の絵付けの卵殻手が誕生したという⁽¹⁰⁵⁾。

3-2-p 有田陶工の家系

酒井田家は、東島徳右衛門と共同で日本初の上絵の磁器を製造した酒井田柿右衛門[1615-1653]を始祖とし、柿右衛門から数えて十一代目の酒井田洪之助が存命である。初代柿右衛門から洪之助までの十一世代は、いずれも「酒井田柿右衛門」の名を冠している。この陶工たちは、製品に印をつけるときには、「酒柿」という表意文字を使用した。このほか主に以下の家系について述

べている。当時深川栄左衛門が代表を務めていた深川家、「製磁社」を設立した辻家、深海百婆仙を祖とする深海家、李参平と一緒に働いていた朝鮮人の一人が設立したとされる岩尾家、1780〔安永9〕年頃創業し当時の当主が田代助作であった田代家、岩松三郎が1750年頃創業した岩松家、1780年頃に絵付師によって創設された今泉家、1680〔延宝8〕年頃に絵付師が創業し当時直径4尺の大皿を製作していた梶原家、1835〔天保6〕年頃創業され当時直径4尺の大皿を製していたという福島家、1600年頃の朝鮮人の陶工副島雲鶴を祖とする副島家、弓野窯を営んだ藤孫家、1873〔明治6〕年に装飾家として注目された樋口家の弟子松尾喜三郎、藤常高の優秀な弟子であり、献上品を製作し、藤常孝の後継者となった樋口忠左衛門の樋口家である⁽¹⁰⁶⁾。

【筆者考察：有田の陶工に関する記述は、主に『府縣陶器沿革陶工傳統誌⁽¹⁰⁷⁾』に掲載された塩田真の報告に基づくと推測される。ブリンクリーは酒井田家、深川家、深海家、岩尾家、田代家、岩松家、瀬戸口家、今泉家、梶原家、福島家、大串、竹下、前田、岩崎家、副島家、松尾家、樋口家、の順にこれらの陶工の家系を挙げた。このうち深川家から福島家までの順番は塩田の報告と同一であり、内容も重なる⁽¹⁰⁸⁾。】

3-2-q 亀山焼

長崎の亀山窯の創始者は大神甚五郎。開窯は1803年とする説が有力だとする。中国の青花磁器を模した様式の磁器は、すぐれた絵付師の技術に支えられほどなく人気を得た。二代目大神甚五郎は1846年に事業を放棄し、薩摩の苗代川に移り、1878年に没す。明治5年〔1872年〕、有田の陶工、亀井佐兵衛がこの産業の復興を試みるが数度の焼成の失敗から損失を被り断念した⁽¹⁰⁹⁾。

3-2-r オールド・ジャパン、金欄手様式磁器、鍋島との比較

欧米のコレクターのあいだで評判の高い日本陶磁は伊万里と鍋島の色絵磁器であり、伊万里の大半はヨーロッパ向けに製作されたヨーロッパ趣味のデザインの品だとする。ヨーロッパのコレクションで「オールド・ジャパン」の名で所蔵されている作品の器形はほとんど、蓋付壺、頸が広く背の高い所謂喇叭形瓶、ピーカー、瓢形瓶、皿である。しかしながらこの「オールド・ジャパン」は、日本の陶芸家の技術力や日本の玄人の自然への傾倒を受け継いでいない。

プリנקリーは「オールド・ジャパン」と呼ばれた西洋向け輸出品はオランダ人の影響を受け外国の市場に合わせたデザインであり、これにより日本の評判は失墜したと評す⁽¹¹⁰⁾。

「日本向けに作られた伊万里の磁器は、海外向けのそれとは質も器形もかなり異なる。その大半は、大皿、鉢、蓋のない碗、中皿、広口の水注、瓶などで、花瓶や装飾用の品は例外的である。これらの道具の多くは、当然のことながら、比較的粗く、粗末な装飾が施されているものであった。しかし、多くの器物は、素地のきめ細かさ、釉薬の光沢、色調、均一性、上絵が生彩かつ清純で、創意に富み、装飾は繊細に仕上げられ、あらゆる点で優れていた。それら〔伊万里〕は素地が厚く総体的に中国磁器よりも硬いが、全体的に見ると、装飾的な美しさの着想において中国磁器よりも優れていると言えるだろうし、施工の技術や丁寧さでは全く劣っていない。有田の絵付師が、自国の芸術産業の他の分野から題材を借りたのか、それとも自分で考えたのかという疑問はさておき、有田の磁器は文様の主題の種類が豊富であり、中国磁器よりもこの点勝っている。何故なら、中国が扱うモチーフの分野はあまりにも狭く、飽きるほど同じモチーフを反復し変化をつけたただけであったのに対し、日本はまったく反復しなかったためである。多くの古い伊万里⁽¹¹¹⁾の標本は、通常5点か10点、20点の組物であるが、細部は異なり、一つとして正確に同じものはない。なかでも特に優れたものは、常に細心の注意を払って描かれており、上絵は純粋で鮮やか、染付の青は豊かで澄み、赤は柔らかく均一で堅牢なことは言うまでもない。世界的人类史上、日本人向けの伊万里ほど洗練された装飾的な食器に恵まれた民族はいない。〔伊万里の価値は〕18世紀ヨーロッパの「オールド・ジャパン」ではなく、これら〔日本向けの器〕によってこそ評価されるべきである。1857年の開国以来、オランダ人が輸出したものよりもはるかに上質なものが西側へと送られてきたが、オランダ人の商品の評判はいまだに残っており、伊万里焼が西洋でしかるべき位置を占めることを妨げている⁽¹¹²⁾。」と分析した。

一方、「少量ながらヨーロッパへ輸出されていた⁽¹¹³⁾」とされる鍋島焼についてもプリנקリーは興味深い指摘をしている。「鍋島焼は、いわゆる『オールド・ジャパン』と呼ばれる伊万里の焼物とは2つの点で大きく異なっていた。第一に、その釉薬は、多かれ少なかれ青緑がかったものではなく、純粋な乳白

milk-white で、柔らかく安らかな色調である。この特徴は、鍋島焼の優れた点の一つであり、その重要性をよく認識する必要がある。この特徴は、釉薬の上にすべて上絵で装飾された磁器の方が、青味を帯びた釉下彩が施されたものよりも顕著であるが、どちらのクラスにおいても、表面の乳白〔の色〕こそが産地と品質の証しとなる。」このほかにも、18世紀にフランスで朝鮮製とみなされた日本の磁器について、フランスのデュ・サルテルの著作やランドン・ド・ボワゼ・コレクションのオークションカタログに基づいて論じている⁽¹¹⁴⁾。

【筆者考察：とりわけ下線を付けた記述は独創的であり、日本向けに作られた金襴手様式および鍋島的美質を見事にとらえている。金襴手様式の食器に表された装飾文様の豊かさと上絵の色調の美を高く評価している。前述の通り、静嘉堂文庫美術館が所蔵するブリנקリー旧藏品25点のうち17点は金襴手様式、その内14点は国内向け製品のタイプ⁽¹¹⁵⁾である。ブリנקリーは自身のコレクションに基づいて国内向け金襴手様式の特徴を把握したと思われる。また、鍋島についても、乳白色の釉薬の色調からくる美を高く評価している。】

3-2-s 染付磁器

有田の染付の優品は小型の食器が多いとし、中近東の陶工の作のように美しい青の代表例として「極真焼」について特筆する。染付磁器の大作は、国内外向けを問わず素地や青の色調の質が低いと指摘する。最も優れた染付磁器は平戸窯の作品だとする。それは素地が繊細で、純白の釉薬が用いられる。賞賛に浴した中国の色ほどの深みや力強さはないにしても、青の質感が比類のない繊細さと美的な美しさを持つ。絵付文様のモチーフについても、有田は唐草や菱形文様など形式的であるのに対し、〔平戸窯は〕風景、樹木、人物、花などバラエティーに富み絵画的であると評した⁽¹¹⁶⁾。

3-2-t 貫入

有田や大川内の磁器製作者は貫入の技術を成功させていない。伊万里焼の古い作品で上絵具や染付の素地に貫入が認められることがあるが、偶然の産物であるか否かは不明とする。いずれにせよ、貫入の形や大きさは中国のように管理されていなかったと述べる⁽¹¹⁷⁾。

3-2-u 明治期の有田磁器

明治期の製品については、有田の陶工の進歩を評価しつつも、上絵具の質の低さを指摘している。江戸期の絵具は耐久性が高く、豊かで光沢を保つと評価し、明治期の絵具は耐久性が低く日々の暮らしで生じる洗浄で劣化すると指摘した。品質低下の理由は、封建制度崩壊により藩の庇護を失ったことにより陶工たちが困窮したためであると分析する。1880年頃より有田の窯業は復興を始めたが、江戸期の水準を回復するには知的で自由な大衆による支えが不可欠である。また、9～10寸の巨大な皿や壺、灯籠の製作が試みられているが、素材の質が十分でないため、技術的な問題が大きいとする⁽¹¹⁸⁾。

4. 彩壺会の柿右衛門様式磁器研究に認められるプリנקリー著『陶磁芸術』の影響

本章では『陶磁芸術』「第2章 肥前焼」と彩壺会著『柿右衛門と色鍋島⁽¹¹⁹⁾』（1916〈大正5〉年）に共通して使用された、柿右衛門様式磁器の釉色を示す「乳白」という用語をキーワードに、『陶磁芸術』が彩壺会の著作を通じてその後の柿右衛門様式磁器研究に及ぼした影響について考察したい。ただし残念ながら『柿右衛門と色鍋島』では、依拠する源泉の記載を欠くため、両者の関係を証明し難い。そこでまず、プリנקリーと彩壺会の接点を確認することから始める。

大正時代の代表的な陶磁史研究者で、大河内正敏らとともに彩壺会を設立した奥田誠一（1883-1928）は、岩崎家所蔵の陶磁器の調査を依頼され、プリנקリー・コレクションの肥前磁器を調査し、その内容を1923（大正12）年に「清澄園蒐蔵陶磁器目録」にまとめた⁽¹²⁰⁾。さらに奥田は、1927年創刊の陶磁研究雑誌『陶磁』創刊号において、ジームズ・L・ボウズ（James Lord Bowes, 1834-1899）、オーグスタス・W・フランクス（Augustus Wollaston Franks, 1826-1897）、エドワード・S・モース（Edward Sylvester Morse, 1838-1925）、ルイ・ゴンズ（Louis Gonse, 1846-1921）と並ぶ代表的な日本陶磁研究者としてプリנקリーの名を挙げている⁽¹²¹⁾。この言説により、プリנקリーの陶磁研究が彩壺会のメンバー達に共有されていたことがわかる。

さらに、三井系企業の重役を務め、日本陶磁を収集し彩壺会メンバーでも

あった福井菊三郎⁽¹²²⁾(1866-1946)は、1926(昭和2)年に著書『日本陶磁器と其國民性⁽¹²³⁾』を刊行した。同書では伊万里について詳しく説明がなされたが、福井はその典拠として、G.A. オーズレイ & J.L. ボウズ著『日本の陶磁芸術』(1875)、エドワード・S・モース著『モースコレクション日本陶器図録 *Catalogue of the Morse Collection of Japanese pottery*』(1901)、柳宗悦著『陶磁器の美』(1922)、今泉雄作・小森彦次著『日本陶瓷史』(1925)等7冊の当時の代表的な陶磁史関係書とともにプリנקリーの『陶磁芸術』を挙げた。上掲8冊のうち柿右衛門様式磁器と鍋島磁器に関する情報が豊富で『柿右衛門と色鍋島』刊行以前の出版物は『陶磁芸術』をおいてほかにない。加えて、科学者である大河内正敏やニューヨークやシンガポールの三井物産支店で活躍した福井が『陶磁芸術』の英文を読みこなしたことは想像に難くない。

また、荒川正明氏はプリנקリー・コレクションを核とする静嘉堂の有田磁器コレクションが「鑑賞陶磁」というジャンルを考える上で、重要な歴史的意味を有するという興味深い指摘をしている⁽¹²⁴⁾。「鑑賞陶磁」とは、名物をはじめとする茶人の価値観や伝来に由来する基準を基盤とする茶道具の伝統的な価値観とは一線を画する、純粋に造形美を鑑賞し評価する彩壺会により大正期に創始された概念である。プリנקリーと彩壺会は、純粋に造形美に着目し論じていく美術史的な姿勢において共通している。

これまで一般的に、柿右衛門様式磁器の美的表現の優位性を評価した具体的な所見は、1916(大正5)年の彩壺会『柿右衛門と色鍋島』が最初といわれてきた。同書では柿右衛門様式磁器の素地の色について次のように記されている。「柿右衛門を見る人の、先第一に成興を起す處は、其地肌にある、其素地であると、自分は信じて居る。玲瓏たる乳白〔引用文の中の下線は筆者の加筆。以下同様〕の光澤ある素地は、何とも云へぬ温味のある、柔かい快感を與へる許りでなく、夫れに燭れた時の、觸覺の愉快さをも聯想させる。而も白高麗や饒州窯の様に、稍透明の處がないから、冷やかな技工に走り過ぎた様な、感じを起させずに、飽く迄落ち附いて居る。此點は古九谷や鍋嶋の遠く及ばない處で、丁度十六七世紀頃のデルフトの素地を、一層堅實にして其弱々しい處を、取り去った趣きがある⁽¹²⁵⁾。」柿右衛門様式磁器の素地の色を「乳白」とするのは、和文献では管見の限り同書が初出である。しかも「乳白」の語は同書の本文や作品解説に実に14回も連続して使用されているため、この語の存在感

はあまりに際立っている。ちなみに同書では同じ色に対応する有田の名称とされる「濁し手」という用語は使用されていない。

一方、本稿3-2-d掲載の抄訳にみるように、プリנקリー著『陶磁芸術』の「酒井田柿右衛門」に関する項目では、花の丸文、龍、鳳凰、竹、梅、松などの代表的なモチーフ、文様を数か所に偏在させ、広い余白を設ける所謂非対称の美など、柿右衛門様式の美質が的確に叙述されたことに加え、釉薬の色の特徴について次のように述べる。「柿右衛門の焼物、あるいは彼の流派の焼物には、乳白 milk-white の表面が見られ、時には朝鮮や中国の象牙色の白に近いものもある⁽¹²⁶⁾。」また、本稿3-2-kでは、「柿右衛門の焼物、あるいは彼の流派の焼物には乳白 cream-white の表面が認められ、時には朝鮮や中国の象牙色 ivory-white の白に近いものもある。」と述べている。柿右衛門様式磁器の色について、節により「milk-white」と「cream-white」という2種類の用語が使用されているが、和訳すればどちらも「乳白」になろう。このようにプリנקリーが、彩壺会が用いた「乳白」の源泉となった可能性が想起される「milk-white」や「cream-white」という用語を先行して用いたことに注目したい。

加えてプリנקリーは、1885年にニューヨークのエドワード・グレーのギャラリーで開催された彼のコレクションの売立のための目録『古美術の日本・中国および朝鮮の磁器、陶器、軟質施釉陶器から成る「プリנקリー・コレクション」の記述 DESCRIPTION OF “THE BRINKLEY COLLECTION” of Antique Japanese, Chinese and Korean Porcelain, Pottery and Faience⁽¹²⁷⁾』に解説を寄せている。これは短編であるが柿右衛門様式に関わる内容は『陶磁芸術』と重なる。彼の「柿右衛門」観はすでに1885年時点で確立していたと思われる。該当部分を抜粋する。「柿右衛門の作品の素地はきめ細やかで汚れなく、叩くと澄んだ鐘のような音がする。その愛らしく柔和でありながら艶やかな乳白の釉 milk-white glaze は、みごとに調和した簡素な絵付けの背景をなしている。上絵具は透き通り色調は豊かであるが、色数は少ない。マットな赤、草色の緑そして青紫の色がその基本色である。装飾モチーフとしては、花文様が最も一般的であろう。しかし龍や鳳凰、竹、梅、松、飛翔する鳥、柴垣、様々な形の菱形文様などもしばしば描かれる。このやきものの特徴は、絵付けの希薄さだけでなく配置にも表れている。文様は器全体に分散させるのでは

なく数箇所に集中している。この作品は、余白を可能な限り広く設けた小さないくつかの絵に囲まれたかのようなものである⁽¹²⁸⁾。」(拙訳)

柿右衛門様式磁器の最大の美質を表す釉の色調を表す用語「乳白 milk-white」の初出は、和洋を通じこの売立目録の解説であったと推測される。また、プリנקリーが柿右衛門作と考えた作品の特徴が、静嘉堂文庫美術館が所蔵するプリנקリー旧蔵の柿右衛門様式作品「色絵秋草文八角瓶」、「色絵団龍文蓋物」、「色絵孔雀牡丹文輪違透小鉢」⁽¹²⁹⁾にみられる特徴と見事に共通することにも気付かされる。プリנקリー・コレクションが岩崎彌助にコレクションを売却したのは、恐らく清澄園八角堂が完成した1890年頃と推測される。したがってプリנקリーは、売立目録の解説を執筆した当時はまだ、静嘉堂文庫美術館が蔵する磁器コレクションを手元に置いて研究することができる状況にあったはずである。さらに、彩壺会『柿右衛門と色鍋島』において、柿右衛門様式磁器の乳白色の素地の色を白高麗や中国磁器と比較して論じる考え方も、本稿3-2-b節や3-2-k節下線部と共通している。

明治期における柿右衛門様式磁器に関する日本側の解説は、一般的に窯業史や生産窯に関する情報に重点が置かれ、磁器の美質を捉える作品観察に基づく叙述は極めて稀である。西洋でも、プリנקリーが参照したことが明らかな先述のG.A. オーズレイ & J.L. ボウズ著『日本の陶磁芸術』に柿右衛門様式磁器の作風に関する具体的な記述は乏しく、「milk-white」および「cream-white」という用語は使用されていない。また、本書刊行以前の他の欧文献でも、柿右衛門様式の釉にこれらの用語を当てる例は管見の限り前例がない。したがって、「milk-white」および「cream-white」という素地の色から柿右衛門様式磁器の美質を把握する思考法は、プリנקリーが生み出した独自の理論であったと思われるのである。

しかも興味深いことに『陶磁芸術』では、「乳白 milk-white」および「cream-white」という用語が鍋島焼と平戸三川内焼にも採用されている。鍋島焼の釉薬は「純粋な乳白で、柔らかく安らかな色調である」「表面の乳白[の色]は産地と品質の証である」(本稿3-2-r節抄訳下線部)、平戸三川内焼については「美しい平戸焼の素地は乳白で、クレーパーの粘土のようにきめ細かい」(本稿3-2-n節抄訳下線部)と説明している。しかしながら、『柿右衛門と色鍋島』では色鍋島に関する解説に「乳白」の語は一切みら

れない。

筆者はかねてより、あたかも柿右衛門様式だけが乳白色であるかのように、現在「乳白手」という用語が柿右衛門様式のみで使用される点に疑問を持ってきた。しかし、鍋島や平戸三川内焼にも青味の強くない、柿右衛門様式の乳白色に近い色の素地は認められると思われる。数値基準がないためその区別は感覚的で曖昧と言わざるを得ないが、乳白色という特徴は柿右衛門様式磁器のみに固有とは言えないだろう。しかしながら、彩壺会がこの語を柿右衛門様式磁器だけに用いたことから、その後「乳白」が柿右衛門様式のみを規定する用語として定着するに至ったと推測されるのである。

結語

プリנקリーの経歴や業績を俯瞰しつつ、その著書『陶磁芸術』「第2章 肥前焼」の全体を概観することにより、本書の肥前磁器の産地の歴史、材料の科学的手法による把握、美術史的な作品研究が当時の陶磁史専門書との比較の上でいかに独創的かつ先進的なものであり、同時に高度な専門知識に基づいたものであったかを具体的に示すことを試みた。当時、日本文献に書かれた肥前磁器に関する情報がこれほど多く英訳され、欧米人に提供された例はなかった。西欧における肥前磁器の認識は一新されたことであろう。また、理工系のプリנקリーの把握力に基づき化学者達の難解な材料の科学分析の成果が、この陶磁史研究書に盛り込まれ、貿易史・窯業史・美術史に科学の知識が加わり、学際的な分析を行われ点も前例がなかった。プリנקリーの陶磁器の美質への洞察力、文理にわたる視野の広い学識こそ、このような総合的な陶磁史研究を成立させるための条件であったといえよう。

静嘉堂文庫美術館が所蔵するプリנקリー・コレクション25点は、国内向けの質の高い金襴手様式を中心に、鍋島、柿右衛門様式から成り、西洋向け輸出品は3点しか含まれていない。静嘉堂美術館所蔵品の質の高さは、プリנקリーの鑑識眼および『陶磁芸術』の信憑性を担保する意味を持つとともに、プリנקリーが国内向け製品の優位性を自身の収集品に基づき把握したことも確認できる。『陶磁芸術』では、国内向け金襴手様式磁器と「オールド・ジャパン」と称した西洋向け輸出品と国内向け製品の相違が対立的に示され、国内向

け金欄手様式磁器の美的価値が高く評価された。西洋向け輸出磁器に基づいて肥前磁器を把握した同時代の西洋人の潮流から解き放たれ、西洋世界から遠く閉ざされた日本で収集した製品に立脚する、いわば孤立した状況下で醸成された彼の研究は、西洋の陶磁史からも日本の陶磁史からも完全に独立した肥前磁器観を確立したのである。

柿右衛門様式磁器の美を語る上で欠かせない「乳白 milk-white」という用語は、1885年にニューヨークで刊行された売立目録の記述が初出であるが、それよりはるかに発行部数の多い『陶磁芸術』によって総合的な形で伝えられた。本書は彩壺会メンバーたちの考察の源泉となり、「乳白」という用語は彩壺会の『柿右衛門と色鍋島』を通じて広まり、その後の肥前磁器研究に継承されたものと思われる。ただし、プリנקリーは彩壺会が「乳白」と訳し用いたと推測される「milk-white」および「cream-white」という用語を、柿右衛門様式のみならず、鍋島、平戸焼の特徴としても使用した。しかし、「乳白」の語は『柿右衛門と色鍋島』において柿右衛門様式のみを選択的に用いられた。このことにより「乳白」は、柿右衛門様式の最大の特徴を表す用語として突出して認識され、現在にいたるまで柿右衛門様式磁器の美しさの根源をもっとも端的に表す用語として継承されてきたものと思われる。

註

- (1) アイルランドは当時イギリス連邦の支配下にあり、独立し共和国となったのは1949年である。
- (2) F. Brinkley, *JAPAN AND CHINA Their History Arts and Literature*, vol. 1-8, T. C & E. C. Jack, London, 1903-1904. (神田外語大学附属図書館所蔵) 副標題紙に〈JAPAN AND CHINA Their History Arts and Literature, Library Edition/Limited ed. of 500 Numbered Copies for the United Kingdom, of which this is NUMBER 394〉との記載。見返しに〈ROYAL MUSEUM & LIBRARIES * SALRORD * 3 AUG, 1904〉との紫の蔵書印あり。第8巻『陶磁芸術』は1904年刊行。
- (3) フランシス・プリנקリー『語學獨案内』印刷局、1875年(神田外語大学附属図書館所蔵)。
- (4) エフ、プリנקリー、南條文雄、岩崎行親編『和英大辭典』第四版、三省堂書

- 店、1897年；エフ、プリנקリー、南條文雄、岩崎行親編『和英大辞典』第十版、三省堂書店、1904年（神田外語大学附属図書館所蔵）。
- (5) Edited by F. Brinkley; with an essay on Japanese art by Kakuzo Okakura, *Japan: described and illustrated by the Japanese written by eminent Japanese authorities and scholars*, vol. 1-8, Edition De Luxe, J. B. Millet, Boston, Mass., 1897. (神田外語大学附属図書館所蔵)。
- (6) J. E. Hoare, Captain Francis Brinkley (1841-1912): Yatoi, Scholar and Apologist, *Britain & Japan: Biographical Portraits*, vol. III, ed. J. E. Hoare, Japan Library, 1999, p. 103; Dallas Finn, 'Frank Brinkley (1841-1912)', *Kodansha encyclopedia of Japan*, vol. 1, Kodansha, Tokyo & New York, 1983, pp. 170.
- (7) ジェイムズ・ホアー「第二章 明治に本における英国人ジャーナリスト」『英国と日本——日英交流人物列伝』イアン・ニッシュ編、博文館新社、2002年、pp. 57-58；五十嵐睦子「F. プリנקリー」『近代文学研究叢書』第13巻、昭和女子大学近代文学研究室編、昭和女子大学近代文学研究室、1959年、p. 302。
- (8) Finn 1983, p. 171.
- (9) プリנקリーが集めた大規模な浮世絵コレクションはニューヨーク市民図書館 New York Public Library に寄贈された (Finn 1983, p. 171 参照)。
- (10) プリנקリーが集めた陶磁コレクションの一部は1885年にニューヨークのエドワード・グレーのギャラリーで展示・売却された。この際刊行された以下の展示目録には800点の日本、中国、朝鮮の陶磁器が掲載されている (Gallery of Edward Greey, *DESCRIPTION OF "THE BRINLEY COLLECTION" of Antique Japanese, Chinese and Korean Porcelain, Pottely and Faience: revised by Captain F. Brinkley, R. A.*, On exhibition and for sale at the Gallery of Edward Greey, New York, 1885.)。内訳は、日本陶磁448点、中国陶磁329点、朝鮮陶磁23点である。
- (11) 柴柳美佐「ボストン美術館の肥前磁器について——コレクション形成の視点から」『九州産業大学柿右衛門様式陶芸センター論集』第4号、2008年、pp. 144-150；福永愛「19世紀末における日本陶磁への西洋の目——ジェイムズ・L・ボウズ、エドワード・S・モース、フランシス・プリנקリーを中心に——」『明日へ翔ぶ——人文社会学の新視点——3』公益信託松尾金蔵記念奨学基金編、風間書房、2014年、p. 266。
- (12) ベルギー公使ダヌタン夫人の1900年5月24日の日記によれば、プリנקリーは多数の陶磁器コレクションを自宅に所蔵していた。しかし、その前日に発生した火災で

- プリנקリーの邸宅は焼失し、彼の陶磁器コレクションとともに焼失したとされる
(Baroness Eleanora Mary d'Anethan, *Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan*, London, 1912, p. 232. (神田外語大学附属図書館所蔵) 邦訳: エリアノーラ・メアリー・ダヌタン著、長岡祥三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』中央公論社、1992年10月、pp. 187-188参照)。
- (13) 下村寅太郎「プリנקリーさん父子 —— 二代の親日家」『明治の日本人 —— 雁のたより』3 北洋社。p. 95。
- (14) プリנקリーの陶磁コレクションに関する主要な研究を以下に挙げる。長谷川祥子「静嘉堂所蔵の伊万里 —— プリנקリー旧蔵品 とのかかわりについて —— 」『陶説』528号 1997年3月、pp. 11~17; 長谷川祥子「静嘉堂の消朝陶磁」『静嘉堂蔵消朝陶磁景 徳鎖官窯の美』静嘉堂文庫美術館 2006年、pp. 127-132; 長谷川祥子「静嘉堂の肥前磁器コレクション」『静嘉堂蔵 古伊万里』静嘉堂文庫美術館 2008年、pp. 127-132; 荒川正明「伊万里磁器の精華」『静嘉堂蔵 古伊万里』静嘉堂文庫美術館 2008年、pp. 6-17; 柴柳2008; 拙稿「明治期における柿右衛門様式磁器の流通 —— 外国人の収集と海外輸出を中心に —— 」『九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第5号、2009年、pp. 37-57; 福永2014。
- (15) 静嘉堂文庫美術館『静嘉堂蔵 古伊万里』2008年。
- (16) 静嘉堂文庫美術館『静嘉堂蔵 清朝磁器 景德鎮官窯の美』2006年。
- (17) Leslie Stephen, *Dictionary of National Biography*, Vol. VI, Macmillan and Co.: New York, Smith, Elder, & Co., London, 1886, pp. 347-348.
- (18) 五十嵐 1959, pp. 290-291。
- (19) 五十嵐 1959, pp. 290-291。; Stephen 1893, Vol. XXXV, pp. 58-59.
- (20) 五十嵐 1959, p. 292。; イアン・C・ラックストン (長岡祥三、関口英男訳)『アーネスト・サトウの生涯 —— その日記と手紙より —— 』雄松堂出版、2003年、p. 452。
- (21) 五十嵐 1959, p. 293。
- (22) プリנקリー 1875。
- (23) 松峰隆三『プリנקリー「語学独案内」解題』桐原書店、1977年。
- (24) 五十嵐 1959, pp. 293-294。
- (25) 同紙は1897年日本の宣伝機関として創刊された日刊英字新聞『ジャパン・タイムズ』と1918年に合併し現在に至る。
- (26) ホアー 2002, pp. 50-55。

- (27) 同書、pp. 56-57。
- (28) 明治30年頃プリנקリーは港区麻布広尾町三番地に西洋館を建て妻と子供たちと共に暮らしていた（五十嵐 1959、p. 294参照）。それ以前は芝区田町の二階建ての洋館に居住していた（河鍋晩斎記念美術館編『河鍋晩斎絵日記：江戸っ子絵師の活写生活』平凡社、2013年参照）。
- (29) ホアー 2002、p. 57。
- (30) 同書、p. 49。
- (31) プリנקリー・南條・岩崎 1896。
- (32) 長森清「親日家プリנקリー親子の生涯と功績」『英文學論考』Vol. 42、立正大學英文學會編、2016年、p. 11。
- (33) Brinkley 1897. 神田外語大学附属図書館に所蔵される同書はこの De Luxe 版である。
- (34) 長森 2016、p. 18。
- (35) プリנקリーの代表作の内容は長森清氏が要約し紹介されているため参照された（長森 2016、pp. 17-20）。
- (36) 葬儀は築地三一教会で行われた（澤木智恵子「日本語新聞の死亡記事にみる F・プリנקリーの業績と評価」『教養デザイン研究論集』第11号、明治大学大学院教養デザイン研究科 [編]、明治大学大学院、2017年 2 月、pp. 1-2 参照）。
- (37) 澤木 2017、pp. 4-5。
- (38) 同書、pp. 5-7。
- (39) ホアー2002、p. 57。
- (40) アーネスト・サトウは1862年より1883年日本語に堪能な外交官として駐日イギリス公使パークスの片腕として活躍。1895年より1900年には駐日公使として日本に滞在した。
- (41) ラックストン 2003、p. 450。
- (42) 長谷川 1997。
- (43) 静嘉堂文庫美術館 2008。
- (44) 長谷川 2008、pp. 18-19。
- (45) 設計者であるジョサイア・コンドルとプリנקリーは、共に工部大学校の教授として同僚であったことから親交があった。
- (46) 原徳三「岩崎彌之助深川邸西洋館の研究 立面意匠の復元的考察を中心に」『建築

- 史学』40号、2003年3月、pp. 2-34；原徳三「岩崎彌之助深川邸西欧館の研究 南側立面意匠の復元的考察を中心に」『建築史学』44号、2005年3月、pp. 27-38。
- (47) 長谷川 2008、p. 128。
- (48) 長谷川 2006、p. 129。
- (49) 同書、p. 129。
- (50) d'Anethan 1912, pp. 411-412. (神田佐野文庫所蔵 E/289.3/D36) (原文：October 7, 1904. [...] The European house is full of beautiful objets d'art, Captain Brinkley having, I am told, sold his fine collection of Chinese porcelain to the Iwasakis for 30,000 yen (£3,000). He might, I am informed, have secured much more for it if he had undertaken to sell it in America, but he considered it was only right that such a collection should be kept in the country, which was very public-spirited of him.)。邦訳：ダヌタン 1992、p. 341。
- (51) d'Anethan 1912, p. 232; ダヌタン 1992、pp. 187-188。
- (52) 何故ならば、西洋では日本のように陶磁器コレクションを桐箱に収め蔵に収蔵する習慣はなく、多数の磁器を所有する場合、家具の上や陳列棚に陳列するのが一般的である。また、プリンクリー邸は洋館であったため、こうした西洋的な方法の陳列をおこなった可能性が高いと推測できるからである。
- (53) Gallery of Edward Greer 1885, Introduction.
- (54) 静嘉堂文庫美術館 2008、図31、32、33、35、37、38、40～43、50、51、57、64、82、83。
- (55) 静嘉堂文庫美術館 2008、図版72～74。
- (56) 福永 2014、p. 260。
- (57) 福永愛氏の論考に各章ごとの要約が掲載されているため参照されたい（福永 2014、p. 261-264）。
- (58) 比較のため参照した1901年以前刊行の日本陶磁を取り上げた主要な欧文書を挙げる。Albert Jacquemart & Edmond le Blant, *Histoire artistique, industrielle et commerciale de la porcelaine : accompagnée de recherches sur les sujets et emblems* [...], Paris, 1861; Augustus W. Franks, *Japanese Pottery*, Piccadilly, 1880; George A. Audsley & James L. Bowes, *Keramic Art of Japan*, London, 1881; James L. Bowes, *Japanese Pottery*, Liverpool, 1890; S. W. Bushell, *ORIENTAL CERAMIC ART*, New York, 1897.

- (59) Soame Jenyns, *Japanese Porcelain*, London, 1965.
- (60) Audsley & Bowes 1881.
- (61) ジェニンスは『日本磁器』の参考文献として以下のハニーの著書を挙げた。W. B. Honey, *The Ceramic Art of China and Other Countries of the Far East*, London, 1945.
- (62) Jenyns 1965, p. 2.
- (63) 本書の各章内は全体を通じて節に分れておらず小見出しがない。2章も同様である。これら20のトピックは節の見出しではなく、筆者が本文の内容から判断し、独自に設定したトピックの名称である。
- (64) 陶磁用語の「オールド・ジャパン」は金襴手様式磁器や古伊万里様式等における西洋向け輸出品を意味する。
- (65) Engelbertus Kämpfer, *The history of Japan :: giving an account of the ancient and present state and government of that empire, of its temples, palaces, castles and other buildings* [...], volume 1-2, London, 1727 (神田外語大学附属図書館所蔵)。
- (66) 鄱陽湖 (ポーヤンコ) は、中華人民共和国江西省北部、景德鎮に近い長江南岸にある湖。
- (67) この内容は明治13年 7 月 3 日刊東京日々新聞の雑報に掲載された記事に基づくものと推測される。詳細は以下の文献に基づく。有田町史編纂委員会『有田町史陶芸篇』有田町、1987年、p. 21。
- (68) Brinkley 1904, pp. 39-41.
- (69) 西洋で「ブラン・ド・シン blanc de chine」と呼ばれる白磁は徳化窯などの中国製である。
- (70) Brinkley 1904, pp. 41-43.
- (71) かつて白高麗は第二次世界大戦以前まで高麗時代の朝鮮製であると誤って認識されていたが、現在では白高麗は中国の白磁であり、同様に白高麗と呼ばれたものの中にも磁州窯の白釉陶器があることが分かっている。そのため、ブリנקリーの白磁に関する分析は妥当なものと思われる (『角川日本陶磁大辞典』角川書店、2002年、pp. 706-707参照)。
- (72) Brinkley 1904, pp. 43-53.
- (73) Ibid., pp. 54-56.
- (74) 原語は Petuntse。白丕子、ペツンツェ。中国で磁器原料に使用する長ケイ石質岩

石を景德鎮で白丕と称し、これを粉碎、精製して煉瓦状に固めたもの。

- (75) Wurz のフルネームが挙げられていない。人物の特定は今後の課題とする。以降取り上げる科学者の名前の内、筆者がフルネームのアルファベットを併記していないケースも同様である。
- (76) Brinkley 1904, pp. 58-59.
- (77) Ibid., p. 60.
- (78) 原語は diaper。七宝繋、格子、沙綾形などの幾何学文様を指したものと思われる。
- (79) Brinkley 1904, pp. 61-64.
- (80) *を伴う図版番号は、図録（静嘉堂文庫美術館 2008）に掲載された図版の番号である。各資料に関する作品解説は拙稿を参照されたい（櫻庭 2009, pp. 41-43）。
- (81) 『柿右衛門様式研究 ― 肥前磁器 売立目録と出土資料 ― 』九州産業大学21世紀 COE プログラム柿右衛門様式陶芸研究センター売立目録研究委員会、2008年、pp. 47, 60（図198, 300）。
- (82) フルネームが挙げられていないが、ゴットフリード・ワグネル（Gottfried Wagner, 1831-1892）と推測される。
- (83) オランダの薬学者、科学者。1881年より東京大学医学部製薬学科の教師を務めた。帰国後アムステルダム大学教授。
- (84) Brinkley 1904, pp. 64-74.
- (85) Jacquemart & le Blant 1861, p. 30.
- (86) Arnoldus MONTANUS, *Les Ambassades Memorables*, London, 1670.
- (87) ワーヘナールとはオランダ商館長を務めたドイツ人のザカリアス・ワーヘナール（Zacharias Wagenaer, 1614-1668）を指す。
- (88) Audsley & Bowes 1881.
- (89) 東インド会社文書の研究により、この注文が出されたのは1659年で、製作されたのは青地に金彩で花を描いた磁器であることが明らかにされている。ブリנקリー自身はこのワーヘナールに関わる青地の製品をモンタヌスの引用文によって把握した訳である。筆者はこの説明に該当する青字に金彩の花文を表した作例を複数実見し、それらが梅花文であることを確認している。そのため、ボウズ等によるサンザシ説は誤認であると考える。
- (90) Brinkley 1904, pp. 75-78.
- (91) Ibid., pp. 79-83.

- (92) 静嘉堂文庫美術館 2008、図74。
- (93) 同書、図72、73。
- (94) Audsley & Bowes 1881, p. 142, PL. XII.
- (95) Brinkley 1904, pp. 83-84.
- (96) Ibid., p. 85.
- (97) ドレスデンのアウグスト強王の収集はその没年1733年まで続いたことは周知の通りである。従って、これは誤認である。
- (98) Brinkley 1904, pp. 86-87.
- (99) Ibid., pp. 87-90.
- (100) Ibid., pp. 92-93.
- (101) 今日鍋島として認識される製品の多くは染付が使用されているため、この説明はブリנקリーの誤解か誤記であると推測される。
- (102) 静嘉堂文庫美術館所蔵ブリנקリー・コレクションには鍋島の青磁も含まれる（例：静嘉堂文庫美術館2008図、30）。
- (103) Brinkley 1904, pp. 94-99.
- (104) Ibid., pp. 100-109.
- (105) Ibid., pp. 110-112.
- (106) Ibid., pp. 112-118.
- (107) 農務省、工務編『府縣陶器沿革陶工傳統誌』有隣堂、1886。
- (108) 同書 pp. 141-145。
- (109) Brinkley 1904, pp. 118-119.
- (110) Ibid., pp. 119-122.
- (111) 文脈から見てここで使用された用語「伊万里」は金襴手様式磁器を指している。
- (112) Brinkley 1904, pp. 122-123.
- (113) これはブリנקリーの誤認であると思われる。鍋島焼は將軍家への献上品であるため江戸期に輸出されたことは考えられないが、明治期には西洋へ運ばれた。
- (114) Brinkley 1904, pp. 124-125.
- (115) 静嘉堂文庫美術館 2008、図31、32、33、35、37、38、40-43、50、51、57、64、82、83。
- (116) Brinkley 1904, pp. 127-128.
- (117) Ibid., pp. 128-129.

- (118) Ibid., pp. 129-130.
- (119) 彩壺会『柿右衛門と色鍋島』現代之科學社、1916（大正5）年。
- (120) 長谷川 2008、p. 10。
- (121) 奥田誠一「東洋陶磁器の鑑賞（欧米の蒐集家へ）」東洋陶磁研究所編『陶磁』第一号、1927年11月、p. 4。
- (122) 福井菊三郎は三井財閥の幹部で、三井合名常務理事、三井物産常務取締役、三井銀行取締役等を歴任。
- (123) 福井菊三郎『日本陶磁器と其國民性』大橋光吉編、1927年2月。
- (124) 荒川 2008、pp. 6-7。
- (125) 彩壺会 1916、p. 38。
- (126) Brinkley 1904, pp. 89.
- (127) Gallery of Edward Greer 1885.
- (128) Ibid., pp. 8, 9.
- (129) 静嘉堂文庫美術館 2008、図17、22、23。

Acknowledgement : I would like to express my deepest gratitude to Dr. Julia Weber and Dr. Cora Würmel of Porzellansammlung, Staatliche Kunstsammlungen Dresden for their kind help with my research and generosity in providing illustrations.